

主 題：十分だったキリストの御業③

聖書箇所：コロサイ人への手紙 2章15節

テーマ：キリストのみわざがいかに私たちにとって十分なものであったのか？

●ヨハネス・クリュストモス（“クリュストモス”＝「黄金の口」）

今からさかのぼることはるか昔、5世紀にヨハネス・クリュストモスというすばらしい信仰者がいました。雄弁でいっさいの妥協を許さない説教は、彼の代名詞としても知られ、彼はその名にあるように、クリュストモス“黄金の口”と呼ばれていました。そんな彼の説教は、初代教会においても最高のものとして考えられていました。しかし、そうして主に忠実に歩もうとした彼も、ほかの信仰者たちと同様に数多くの試練を経験することになりました。ある日のこと、ヨハネスはローマ皇帝の前に連れて行かれるのです。皇帝は彼に、キリストに対する信仰を捨てるように、キリスト教徒のままでいるのであれば追放すると脅しました。しかし、その脅しに対する彼の応答は驚くべきものでした。彼と皇帝との会話がこのように続くのです。ヨハネスが「この世界は私の父の家です。あなたには私を追放することなどできません」と言うと、皇帝は「私はお前を殺します。」と言います。すると彼は「いいえ、あなたにはそれはできません。私のいのちはキリストとともに神のうちに隠されているからです。」と答えました。「では、私はあなたの宝を取り上げよう」と皇帝は続けます。しかし、彼はまた「いいえ、あなたにはそれはできません。私の宝は天にあり、私の心はそこにあります。」と答えました。「では、私はあなたから人を遠ざける。そうすれば、あなたにはひとりの友もいなくなるだろう」と皇帝は言い放ちました。しかし、ヨハネスはそれに対してもこう答えたのです。「いいえ、あなたにはそれはできません。私には天にあなたが引き離すことのできない友を持っています。私はあなたなど恐れもしません。あなたには私を傷つけることなどいっさいできないからです」と。

すごい応答だと思いませんか？皇帝の前で、キリストへの信仰を捨てないという選択をすれば、どんな悲惨な結果が待っているのかをヨハネスは知らなかったわけではありません。しかし、それでもなお心から神様を愛し、キリストの偉大さを正しく覚えていたヨハネスは、恐れることなく堅く信仰に立ち続けていました。間違いなく彼はすべてにまさるイエス・キリストのすばらしさを自分のこととしてよく知っていたのです。主に対する揺るがない確信、揺るがない信頼は、大きな困難に置かれた彼のうちに希望を与えて、その心を変わずに支え続けるものでした。どんなときもみことばの真理に心をとめて、何よりいつまでもともにいてくださる主の姿に目を向け続けるのは、信仰者にとって大切な、欠かすことのできない態度だったのです。

これは今私たちが見ているコロサイの手紙にも同じことが言えます。今まで見てきたように、コロサイの教会の中には大きな危険が実際に入り込んでいました。イエス・キリストを信じ、受け入れて正しい道を歩み続けていこうとする兄弟姉妹たちのことをだまして、彼らの目を十分なキリストから遠ざけようとする、奪おうとする偽りの教えが広がり始めていたのです。当然、パウロはそのことを良しとはせず、その状況をひどく危惧しました。だからこそ、彼は差し迫る危険を彼らに警告し、彼らを守ってくれる満ち満ちたキリストの姿に心を留めるようにと、偉大な主の姿を改めて思い出させていたのです。それだけでなく、キリストにあって成し遂げられた完全なみわざについても明らかにしていました。そうして偽りの教えにだまされて、不安や恐れに陥ってもおかしくない兄弟姉妹に対して、パウロはキリストだけで十分なのだ、キリストが成し遂げたみわざだけがすべてなのだといま一度思い出させていたのです。

○完全だったキリストのみわざ：キリストのうちに見出だす三つの“十分なもの”

そして先週、先々週と私たちはそんなキリストのうちに見出される十分なみわざについて、二つを詳しく学んできました。

1. 完全な救い 11-12節

2. 完全な罪の赦し 13-14節

どちらもすばらしいものでした。かつて罪の中に死んでいて、神様の正しいさばきを待つしかなかった私たち。神様に対して数え切れないほどの罪を犯し、余りにも大きな負債を負っていた私たち。私たちにはだれにもどうすることもできなかったその罪の問題を、あわれみ深い神様がキリストにあって赦してくださったと教えられていました。生まれながらに犯してきたそのすべての罪を、本来であれば、私たちが罰を受けるべきその罪を、罪のないキリストが私たちの代わりに十字架に打ちつけられて、罪を背負って死んでくださいました。キリストの十字架こそが私たちの負債をすべて支払うのに十分な、完全なものだったのです。十分過ぎるからほかに何かを付け加える必要などありませんでした。私たちはただこのキリストの偉大なみわざにあって、このキリストを信じる信仰のゆえに救いが与えられ、すべての罪が赦されたのです。パウロは改めて、どちらもすばらしいことを思い起こさせていました。すばらしい喜びにあふれた真理でした。

3. 完全な勝利 15節

でも、それですべてではありませんでした。きょうは最後三つ目となるキリストの完全なみわざをコロサイ2:15を中心に見ていきたいと思います。全体の流れをいま一度思い返すために、8節からお読みします。

コロサイ2:8-15

「:8 あのむなし、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。それは人の言い伝えによるもの、この世の幼稚な教えによるものであって、キリストによるものではありません。:9 キリストのうちこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。:10 そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。:11 キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。:12 あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。:13 あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、:14 いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。:15 神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。」

三つ目に見出される十分なみわざは「完全な勝利」でした。キリストの成し遂げた勝利が、確かに完全で、十分なものであったからこそ、ほかに何かを付け加えることなどあり得なかったのです。そのことをパウロは15節で「神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました」と述べていました。さて、ここでいきなり「武装を解除」したとか、「捕虜として凱旋の行列に加えられ」たとか、軍事的な場面を描くことばが出てきました。パウロは突然何を言い出したのだろうと、不思議に思った方もいるかもしれません。でもこれらのことばは、キリストの十字架にあって、いかに圧倒的な勝利が収められたのか、その様子を鮮明に描くものでした。完全な罪の赦しをもたらしてくれた十字架というのは、同時にさまざまな敵に対して完全に勝利された、力強い主のみわざが現れていたのです。私たちが十字架を見るときに、私たちはそこにすばらしい勝利宣言を見て取ることができます。この15節は、私たちにそのことを教えてくれているのです。では具体的にどんなことがなされたのか、もう一度よく見てください。

ここでまず注目してほしいのは、パウロが三つの動詞を用いていたということです。15節の中に三つの動詞が出てきていました。パウロはそれらの動詞を通して、神様が十字架において、キリストにおいて何を成し遂げたのかということ表現していたのです。神はキリストにおいて「武装を解除して」、「さらしものとし」、そして「捕虜として凱旋の行列に加えられました」と記されています。

1) 「武装を解除する」

まず一つ目に「武装を解除する」という動詞が出てきました。このことばは興味深いもので、もともとこれには「何かをはぎ取る」とか、「何かを何かから完全に分離する」という意味があります。また、「衣服を脱ぐ」といった意味も含まれていました。これを聞いて何か聞き覚えがあるなと思う人もいられるかもしれません。実を言うと、これと同じ語源を持つことばは、以前見た2：11でも用いられていました。パウロは11節で、キリストにあって救われた者たちが「肉のからだを脱ぎ捨てて」、「キリストの割礼を受けた」のだと教えていました。この「脱ぎ捨て」ということばが、「武装を解除する」と同じ語源を持つことばが使われているのです。また、「武装を解除する」と全く同じことばは、コロサイ3：9にも出ていました。「互いに偽りを言ってははいけません。あなたがたは、古い人をその行いといっしょに脱ぎ捨てて、：10 新しい人を着たのです。」と書かれています。ここで出てきていた「脱ぎ捨てて」が「武装を解除する」と同じことばでした。生まれながらの人間は、みな罪によって墮落して、神様を愛そうとも、その神様のために生きようともしていませんでした。みずからの意思で神様に逆らい続けていた私たちは、例外なくみな罪に支配されて、罪に汚れていたのです。キリストを知る前の私たちは、罪ゆえに神様の御怒りを受けて滅ぼされてしかるべき存在でした。でも、そんな私たちがキリストによって救われたときに、罪に汚れた古いからだは除かれて、キリストのため新しく生きる者へと造り変えられました。古い汚れた服は脱ぎ捨てられて、新しい人を、新しい服を身につけたのです。そして罪に支配されていた者たちは、キリストにあってその支配から、罪の奴隷から解放されました。

ここで「武装を解除する」とパウロが口にしたとき、描いていたイメージは同じでした。神様は十字架にあって、神様に逆らっている敵たちの身に着けていたあらゆる力や装備を完全にはぎ取ってしまったということです。敵が持っていたありとあらゆる武器を、どんな驚異的な武器や、どんな強固な防具もすべて取り上げてしまったと言うのです。しっかりと装備に身を固めている兵士がまる裸にされてしまった様子を想像してみてください。どれだけたくさん武具を持っていたとしても、それを奪われて、力を奪われてしまえば、そのものの脅威は当然薄くなります。以前は手に負えなかった敵であっても、武装が解除されてしまえば、もう恐れを抱く必要はなくなるのです。神様はキリストにおいて、十字架において、それを成し遂げたのだと、まずパウロは教えていました。

2) 「さらしものとする」

二つ目に出てきていたのは、「さらしものとし」です。神様はキリストにおいて、そんな敵をさらしものとされたのです。このさらしものということばには「何かを人の目にさらす」とか「辱める」といった意味合いが含まれています。ですから、「何かを見せしめにして罰する」といった意味でも用いられたりします。「さらしもの」とするということばを私たちが見るときに、人のいない、隠れた場所ではなくて、公の場所において、だれかを人の目にさらして、大きな恥や屈辱を与えることを言うのです。それだけでもイメージがつかめるかもしれませんが、このことばも実は興味深いもので、新約聖書の中でこのコロサイの箇所とマタイ1：19の2カ所だけに登場しています。マタイ1：19には、マリヤの妊娠を知ったヨセフの反応が描かれていました。18節から読んでみると、こんなふうが続いています。「：18 イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。：19 夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったため、内密に去らせようと決めた。」と。

ここで「さらし者にはしたくなかった」というこのことばが同じものが使われていました。ヨセフは自分の妻となるはずだったマリヤが、自分とまだ一緒になっていないのに妊娠したことを知ったのです。当然、彼はマリヤが自分ではなくて、ほかの男性と関係を持ったと思ったでしょう。その当時、そういった姦淫の罪を犯した者に関しては、公の場で罰を与えて、見せしめに辱めるということが一般的に行われていました。だからヨセフは、マリヤを公の場に連れて行って姦淫の罪だと訴えて、彼女に恥をかかせることもできたのです。彼はその権利を持っていました。人々の前で有罪判決を彼女が受ければ、間違いなく彼女の評判は大きく傷ついたでしょう。でもマリヤのことを心から愛していたヨセフは、彼女のことをさらし者とするのではなくて、内密に彼のもとを去らせようとしたのです。これが、ヨセフがとった行動でした。

でも、神様がキリストにあって、十字架にあって、ご自身の敵に対してしたことはこれと全く違いました。神様はご自身の敵をこっそり隠して、そこで何かしたわけではありません。公の場ではっきりと見せしめにして辱めを与えたと言うのです。神様はご自身に逆らう敵の武装を解除しただけではありません。その敵がいかに弱い存在なのかということも十字架にあって公にされました。どれほどそれらが神様の前に無力な存在で、何もできない存在かを全世界に明らかにして、嘲笑の的とされたのです。それがあの十字架で起こったことでした。もっと言うのであれば、あの十字架を見上げるときに、そこに敵の無力さを見せしめとただけではなくて、そんな敵にはるかにまさる力を持ったお方がいったいだれなのかということも、神様は明らかに、明白に示されました。ほかのだれでもないイエス・キリストこそが、どんなものにもまさるお方であることを、罪と敵を打ち負かした唯一の勝利者であることを、あの十字架は明らかにしているのです。

3) 「捕虜として凱旋の行列に加えられた」

イエス・キリストが十字架にあって、敵の武装を解除して、さらしものとしただけではなく、最後にもう1つ「彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました」ということばが出てきていました。こういったことばは、私たちには余りぴんとこないかもしれませんが。私たちはそんな大行列を余り見ません。でも、ローマ帝国の治める時代を生きていた者たちにとっては、これはすぐ思い浮かべることができるような光景でした。どんな光景だったのか——。私たちはことばを通してそれを知ることができます。ウィリアム・バークレーという先生は、その当時の凱旋の様子をこんなふうの説明してくれました。「凱旋式では、勝利した將軍の行列が次の順序でローマの街を通り、街の中心まで行進するのであった。第一に官吏と上院議員たち。次にラッパ手たち。次に征服地から奪った戦利品が運ばれていく。……その後、征服した土地の絵と、征服した地の砦と船の模型。それから、生け贄にされる白い雄牛。その後から、あわれな捕虜たち——敵の王族、指導者、將軍たちがくさりに繋がれて歩いていく。彼らはほどなくして牢に投げ込まれた上、ただちに処刑されることになるだろう。次に、むちを持った囚人係、これに豎琴を手にした音楽隊がつづく。次にかんばしい香りを放つ香炉（こうろ）を振りながら歩いている祭司たち。そして、いよいよ將軍自らの登場である。彼は馬に引かせた戦車の中に立っている。黄金のヤシの葉を刺繍した紫色の上衣（うわぎ）を着、その上には黄金の星が描かれた紫色のトーガ（古代ローマの男性が公共の場ではおった上着）を羽織っている。その手には、ローマの鷲のついた象牙の笏（しゃく）を持っている。將軍の後にはその家族の者が馬に乗っていく。そして最後に、軍隊があらゆる装飾を身にまとい、勝利の叫び『イオ・トリウンペ！』（バンザイ）を叫びながら行進していく。飾りや花輪をいっぱい身につけた行列が、歓声に包まれたローマの街を進むとき——それは、一生に一度見られるかどうかというとてもない一日となったのだ。」と。ことばだけですけれども、これはすごい光景だと思いませんか？考えてみてください。この当時、今の私たちが持っているようなテレビやインターネットは彼らにはありません。町の人たちは戦いに勝利したことを、携帯に届く1通のメールを通して知るわけではありません。彼らは町の中を行進していく壮

大な勝利の凱旋を目の当たりにして知るのです。鳴り響くラッパの音によって、軍隊のバンザイという叫び声を通して、それを耳にして知るのです。これはいったいどれほど大きな出来事だったでしょう。どれほど華やかで、どれほど壮大で、どれほど圧倒的なものだったでしょう。町のすべての人たちはそれを通して知るのです。人々は凱旋の行列とともに捕らえられている捕虜たちを辱めて、圧倒的な勝利を上げた将軍をみなで一緒に大いに褒めたたえていたのです。その街全体にとって、それはもう最高の瞬間だったのです。

「彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました」と言ったときに、パウロはそういった光景をこの15節の中で描いていたのです。もちろんローマの将軍の話をしているわけではありません。ここではもちろん勝利者であり、征服者であるイエス・キリストの凱旋です。神様がキリストにあって、すべての敵に勝利されたことをほめたたえているのです。神様に逆らう敵たちがもうすべて打ち負かされ、捕らえられた敵たちも捕虜として、あとはただ主を待つのみ。十字架にあって、キリストは完全に戦いを制して最後の勝利宣言が既になされたと言うのです。それがキリストにおいて、あの十字架においてなされたみわざでした。

でも、神様はキリストにおいて完全な勝利を上げたと言うけれども、いったいどんな敵に対してそのような勝利をなされたのだろうか、どんな敵の武装を解除してさらしものとし、捕虜として凱旋の行列に加えられたのかということ、みことばははっきりと言ってました。「神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除して」と書いていました。一部ではないのです。ほとんどでもないのです。神様はキリストにおいて、すべての支配と権威に対して、言いかえると神様に逆らっているすべての悪霊や御使い、何よりサタンに対して完全に勝利されたと言うのです。すべての悪霊に対して、すべての墮落した御使いに対して、何よりサタン、悪魔に対して完全に勝利されたのだと言うのです。キリストは、あの十字架においてサタンの力に勝利しました。そのことはみことばがいろいろなところで教えています。ヘブル2：14にこんなふうに記されていました。「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、」とあります。「悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし」と。キリストの十字架において、神様は、サタンと彼に従う悪霊の持っている力をはぎ取って無力なものとし、その無力さを見せしめとして辱めを与え、彼らに対する完全な勝利宣言をなされたのだと言うのです。それが、十字架が成し遂げたみわざだったのです。

あの十字架を覚えるときに、私たちは大切なことを覚えることができます。あそこにおいて、私たち人にはどうすることもできなかった大きな問題——罪も、死も、そしてサタンもすべてキリストによって打ち負かされたのです。罪と死とサタンという、この大きな問題は、あの十字架にあって終わりを迎えました。キリストの犠牲によって罪の赦しは成し遂げられたのです。死に勝利してよみがえったキリストによって、この方を信じる者には新しいいのちが与えられました。そして、そんなキリストの死と復活の偉大なみわざを通して、敵であったサタンも打ちのめされたのです。神様を憎むサタンは、キリストが辱めを受けて、十字架で苦しんで死んだときに、神の御子は公の場で恥を受け、そして死んだと思ったことでしょう。イエス・キリストが十字架にかかったときに、神様の救いの計画はもうここで失敗に終わった、神様に勝利した、希望をすべて奪い去ったとサタンは思ったでしょう。でも実際は違いました。御子の十字架は、希望を失ったものではなく、人々に確かに救いの希望をもたらすものでした。イエス・キリストの十字架は、ご自身が恥を受けたのではなく、辱めをもたらした者の上に辱めをもたらすものでした。御子の十字架はサタンを含むすべての敵の完全な敗北を告げるものだったのです。

私たちは、確かにかつては罪の奴隷として罪に支配されていました。私たちはどうしても死という敵から逃れることもできませんでした。私たちはサタンの力を恐れていたのです。でも、今はもうキ

リストにあって、私たちは罪も、死も、何よりサタンの力さえも恐れる必要はないのです。すべてに勝利されたキリストにあって、私たちは罪の赦しを手にすることができ、永遠のいのちを手にすることができ、キリストとともに勝利者として歩いていくことができます。キリストの勝利の行列にあって、私たちも同じように勝利者として歩み続けていくことができるのです。Ⅱコリント2：14に「凱旋の行列に加えられ」というコロサイと同じことばが出てきますけれども、パウロは14節に「しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってください。」と書いています。私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加えてくださると。勝利はもう成し遂げられた。あの十字架にあって、キリストにおいて神はそれを成し遂げたのだと。もちろんこれはそれぞれの信仰生活において、この先何の問題も困難も起こらないという話をしているのではありません。間違いなく、いやむしろ私たちがキリストに忠実に歩もうとすればするほど、その歩みを妨げようとする敵との戦いを経験します。私たちは心を思い悩ませて、私たちを苦しめる敵と戦わなければいけません。そのような敵は変わらずに今も存在しているのです。罪や誘惑との戦いも確かにいつも経験します。また、それだけではなくて、私たちから喜びを奪い去って、神様やみことばに対して疑いを抱くようにと、活発に働いているサタンがいることをみことばは教えているのです。

Ⅰペテロ5：8には「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」と、ペテロははっきりと言っていました。「食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回って」いましたではありません。「歩き回っています」と。その働きが今もあるということです。また、パウロもこんなふうのエペソ6：11-12に書いています。「：11 悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。：12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」と。ここに出てきていた「主権」と「力」ということばは、コロサイ2：15で見た「支配と権威」と同じものが使われています。私たちの戦い、私たちの格闘は、血肉に対するものではなくて、霊的な戦いがある、暗闇の世界の支配者たち、悪霊やそういったものに対する戦いが存在していると。ペテロもパウロも言わんとしていたことは明白でした。彼らは警告していたのです。私たちの目には見えないけれども、確かに暗闇の敵は存在していると。見えないから存在していないのではなくて、見えなくても存在している。そして信仰者は日々そうやって神様のことを忌み嫌って憎んでいる、神様に逆らっている悪霊や悪魔や彼に従う墮落した者たちとの霊的な戦いの真ただ中にあると。だから、目を覚ましていなさい、戦いがいつ起こっても、いつそれが襲ってきても大丈夫なように、策略に対してしっかりと備えていなさいと。みことばはサタンや悪魔や悪霊といったものの話を空想話として提案していたのではないということです。敵との格闘というのが現実のものとしてあることを警告していたのです。私たちの敵であるサタンは、何の躊躇もなく、神様にずっと逆らい続けている存在です。自分自身が最後には滅ぼされることをわかっているからこそ、より多くの人たちを道連れにしていくために、熱心に働き続けているのです。また、もちろんこのサタンには既に救われた者たちから救いを奪い去るような力は絶対にありません。でも、救われた者に対してもありとあらゆる手段を用いて、神様やみことばに従わないようにとだまして、その心から喜びや平安を奪い去ろうと働き続けているのです。

その働きはずっと続いていて、偽りの父であるサタンが用いる嘘や策略は非常に巧妙なものです。Ⅱコリント11：14にも「しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。」と書いてありました。またある聖書注解者も悪魔の策略に関してこんなことばを述べていました。「悪はその目的を達するまで、悪に見えることはほとんどありません。魅力的で、好ましく、もっともらしいものに見えるからこそ、入り込むのです。それは餌の付いた、上手く隠れた罠なのです。」と。

餌もついていないような、これは罠ですとわかっているものに引っかかる者はいません。でも餌がついていて、うまく隠れているものだから、魅力的で好ましく当たり前のもっともらしいものに見えるから、そういった惑わしやうそに引っかかるのです。サタンはそうやっていろいろ巧みな方法を用いて、人々をキリストから引き離そうと欺き続けているのです。教会を攻撃して、神様の御名を絶えず傷つけようとし続けているのです。私たちはそんな現実の敵との戦いの真ただ中にいますよ、私たちは今、その場に置かれていますよと、みことばは警告していました。だからこそ、私たちも決して惑わされないように堅く立って、神様の武具を身につけている必要があるのです。私たちはこうしてみことばを学び、いつもキリストに目を留めてみことばを通して主を知り、敵に立ち向かう武器をみことばから得続けるのです。そうして勇敢に格闘し続けていく必要が私たちにはあります。その戦いは容易なものではないでしょう。サタンの攻撃を受けて、深い悲しみや失望を抱くこともあるでしょう。それは事実として、現実の問題としてあります。

でも同時に、私たちはその中であって、一つ揺るがない真理を覚え続けることができます。一つ確固たる事実を見出して、そこに希望を見出し続けることができます。いったいどんな真理かという、それは、神様はキリストにあって、十字架にあって、そんな敵たちをもうすでに完全に打ち負かされたということです。サタンやそのしもべがすべてのものを支配しているのではありません。力ある私たちの偉大な神様がすべてのことを支配しています。決して神様に逆らう敵たちが最後にかちどきを上げるのではありません。キリストこそがすべての支配と権威のかしらであって、もうすでに最高の勝利を収めたお方でした。だから、そのキリストのうちにあって、私たちも同じように勝利者として敵に対して勝利しながら歩いていくことができるのです。私たちひとりひとりの力であれば、どう考えても太刀打ちできません。敵は確実に存在しているのです。でも、すべてにまさっておられる、もうすべてに勝利された力あるお方がともにいてくださり、すべての敵の武装を解除してさらしものとし、勝利の凱旋に加えられた、そんな栄光に輝く勝利者である主が私たちとともにいつもいて、守ってくださると。私たちはそれらのものに打ちのめされるのではなく、その方であって勝利することができる。それが十字架を通して現されたイエス・キリストの勝利者である姿でした。

だとすれば、私たちはこんなキリストのみわざのほか、何か別のものを必要とするのでしょうか？このキリストを知っていながら、別の何かをまだ求め続けようとするのでしょうか？神様はキリストの十字架にあって、私たちのだれにもどうすることもできなかった罪の問題も死の問題も、サタンもすべて完全に打ち負かされました。ただ、キリストにあって完全な救いが成し遂げられ、キリストにあって完全な罪の赦しが成し遂げられ、そして完全な勝利がキリストにあって成し遂げられたのです。このキリスト以外の何かを必要とするのでしょうか？そしてそうやってすばらしいみわざを成し遂げられたわけですけれども、そういったすべてのみわざを、神様はただ恵みによってご自身の大きな愛のゆえになしてくださったということです。すばらしいみわざを覚えるときに、私たちはそれらが自分たちの手柄ではいっさいないことを忘れてはいけません。私たち自身が勝ち取ったものは一つとしてないのです。与えられて当然なものも何一つとしてありません。聖く正しい神様の前に、罪に罪を重ねていた私たちにとって、値したのはただ永遠の滅びだけでした。私たちを造ってくださった神様を愛そうともせず、みずから逆らい続けていたような者、その神様から永遠に引き離されて地獄で苦しむのは当然の報いでした。しかし、あわれみ深い神様は、キリストにおいて本来絶対に値しないものを、絶対に値しない私たちに与えてくださいました。最悪のものが与えられて当然の者たちに最高のものを与えてくださったのです。神様はキリストにあって、救いや罪の赦しを、そして主とともに勝利者として生きていくことができるという特権を与えてくださいました。それを大きな恵みのゆえになしてくださった。神様は私たちのような者に、いったいどれほどの愛を示してくださったのでしょうか？キリストは十字架を通して、いったいどんなに深い愛を示してくださったのでしょうか？確

かに私たちはいろいろな葛藤や戦いを日々経験します。突然思いもしなかったような問題が降りかかってきて、恐れや不安を抱いてしまうことがあります。一向に変わらない状況に、終わりが見えないことに対して、悲しみや失意を覚えることもあるでしょう。あるとき過去に犯した大きな罪が自分の心を何度も何度も責め続けて、自分はもう赦されないという思いに陥ることもあるかもしれません。

でもたとえどんなことが起きたとしても、私たちは変わらない一つの真理に立ち続けることができます。それは、神様はキリストにあって、あの十字架にあって、大きな愛をもうすでに示したということです。そしてその愛から私たちを引き離すことのできるものは何一つとしてないということです。パウロはそのことをはっきりと教えていました。ローマ8：35－39にこう記されていました。「：35 私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。：36 「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。：37 しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。：38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、：39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」と。どんな患難や苦しみであろうと、迫害や飢えであろうと、死もいのちも御使いやサタンであろうと同じです。たとえどんなに私たちの目に深刻に見えるものであったとしても、私たちを主キリスト・イエスにある神の愛から引き離すことのできるものは何一つとしてありません。私たちが十字架を見上げるとき、そこに架かれたイエス・キリストを見ると、私たちがいつもそこに神の愛を見出すことができます。罪のない神の御子が、私たちの代わりに罪とされ、御怒りをその身に受けて罰せられ、そのいのちをささげてくださったからこそ、私たちの罪はすべてそこで赦されました。だれもそれを勝ち取った者はいません。ただ、キリストの愛がすべてを成し遂げてくださったのです。そしてこの方を信じ受け入れた者たちは、私たちを愛してくださったこの方によって、圧倒的な勝利者として生きていくことができるのです。そんな圧倒的な勝利者としてキリストにあって生きていくことができるのだとすれば、私たちはほかに何を必要として、熱心に求め続けるでしょうか？だれにもどうすることもできなかった死も罪の問題も、サタンもすべてを打ち負かされた勝利者であられるキリストとともに生きていくことができるというのに、それ以外のいったい何を私たちは求めようとするでしょう。私たちがこのキリストにあって、すべてを手にすることができる、この十分な主とともに歩んでいくことができると。

最後に、スポルジョンはこんなことばを述べていました。よく見ていただいて、自分自身に問いかけてみてください。「勝利を収めたローマの将軍が戦地から帰還したときのように、キリストは支配と権威を捕虜として凱旋の行列に加えられました。十字架は彼の勝利だったのです。そして、彼は捕虜を導かれました。これ以上何を望むことができるのでしょうか？あなたの敵は打ち負かされ、あなたの罪は消し去られ、あなたの死はいのちに変わり、あなたの必要はすべて満たされたのです。あなたはキリストの元に留まらないのですか？『なんと、簡単に自分の道を変えるのですか？』あなたには主よりも愛しい恋人、天の花婿よりも大切な夫がいるのでしょうか？ああ、主を愛しなさい、主の聖徒たちよ。主にしがみつき、主を愛しなさい！主があなたにとっての全てであるように！主イエス・キリストは、ご自分の民のためにすべてを為し、彼らの戦いを戦い、勝利を収め、彼らに代わって天の通りで『捕虜を引き連れ』勝利を祝われました。これ以上、何を望むことができるのでしょうか？確かにキリストだけで私たちには十分なのです。」と。

ただキリストにあって、私たちが完全な救いを、完全罪の赦しを、そして完全な勝利を手にすることができます。この方だけで十分なのです。偉大なみわざを成し遂げてくださったこの方をいつも覚

えて、そしてこの方によって新しく造り変えられた者として、ますます主の栄光を現す者としてともに歩んで行きましょう。